

た江南の縉紳庾抱は、自身も連座して死罪となり、京師に潜伏していた。翌大業十年（614）、同郷の知人である曾に会い、住所を問われたので教えたところ、密告され、庾抱は処刑された。死後、泰山の主簿となつた庾抱は曾に追善供養を命じ、その後に殺すことを宣告した。信じなければ死後に顔が後ろ向きになると言い、曾は言われたとおりにしたが、死後はやはり顔が後ろ向きになっていた、という話。

楊玄感は、隋の司徒であつた楊素の子であり、自身も礼部尚書であつた。大業九年（613）六月、煬帝の二度目の高句麗親征の際に乱を起こしたが、隋軍に敗れ、その年の八月に自殺した。この反乱に加わつていた人物の中に「36李寛」で触れた、李寛の子の李密がいた。乱後、李密は逃亡生活を経て東郡（河南省）の翟讓の元に身を寄せ、反乱勢力瓦崗軍を従えて隋末の群雄の一角を占めるに至つた。

この説話を、唐臨は庾抱の親しい知人から聞いた。

15 隋・孫宝 隋末

隋の末に北方から江都（揚州）に移住した孫宝は、若い頃、死んで四十日以上を経て蘇るという体験をした。冥途で亡母に会い、冥官が書類を紛失したために母が不当に禁獄されていることが判り、母を送つて楽堂に行き、そのままそこにいたが、伯父に現世に送り返された。その際に全身に瓶水をかけられたが、水のかからなかった臂は肉が糜爛して骨が見えるようになってしまった、という話。

孫宝が冥界訪問を体験したのが、隋末に江都（揚州）に移住する前の事か、あるいは移住後の事かは不明である。

唐臨は、貞観七年（633）に公務で江東揚州に出向いた際、この話を揚州の鍼医甄陀から聞いた。当時、孫宝はまだ存命していた。

大業は煬帝が江都以殺されて十四年（618）で終わるが、大業十三

年（617）にすでに長安では李淵が煬帝の孫の楊侑を恭帝として即位させて義寧と改元していた。そして義寧二年（618）に恭帝が李淵に禅譲して隋は滅びた。

注

- (1) 『冥報記の研究 第一巻』（説話研究会編 勉誠出版 1999）拙稿「『冥報記』と作者唐臨」
- (2) 『冥報記』諸本の内、最も所収話数の多い前田家本の構成に基づく。説話番号は前掲『冥報記の研究 第一巻』に拠り、説話標題は前掲拙稿に拠る。本稿における以後の『冥報記』本文（含割注）の引用等も原則として『冥報記の研究 第一巻』所収の前田家本翻刻に拠るが、適宜他の諸本を参考に改変を加えた。
- (3) 高類については拙稿「高類を巡る説話と言説——『冥報記』前史——」（日本女子大学紀要人間社会学部第21号 2011）を参照されたい。
- (4) 信行の生涯については西本照真『三階教の研究』（春秋社 1998）に詳しく述べられている。
- (5) 前田家本の本話割注に「公即李参之父。臨家与親並見之」とある。李参は李密の誤り。
- (6) 岑文本については拙稿『『冥報記』と岑文本』（日本女子大学紀要人間社会学部第18号 2008）を参照されたい。
- (7) 尊経閣本では「白狗」であるが、知恩院本『冥報記』では「白猪」（白豚の謂）となっている。

ば、遠征軍が幽州にいたのは四月であり、岑文本はここで急病により五十一歳で卒している。

12 隋・大業客僧 大業中

泰山廟に止宿した僧の前に死者を治める泰山の神が現れ、僧に先に亡くなった同学の僧が罪のために廟獄で火に焼かれているのを見せ、同学を救うには法華經を書写すればよいと教えた。その通りにすると僧の前に再び神が現れ、同学の僧が既に救われて転生したことを告げた、という話。

この話は、杭州別駕（刺史の属官）の張徳言が前任地が兗州（山東省）であったので詳しく知っていて、唐臨に語った。

39 隋・京兆獄卒 大業中

京兆の郡に戯れに囚人を苦しめ楽しむ残酷な獄卒がいたが、後にその家に生まれた男の子は首の部分に首枷のような肉が付いており、歩けるようにもならないまま数歳で死んだ、という話。

この話は、いつ誰から聞いた話であるかを唐臨は記していない。当時、噂として多くの人の口の端に上って流布していた類の話で、特定の誰かのみが語っていたわけではなかったのかも知れない。

唐臨の生年は開皇二十年（600）頃であり、大業年間には唐臨にとってはおよそ五歳から十八歳までの少年期であった。唐臨は京兆長安で育っており、本話は京兆に属する郡の話である。少年期に誰かに聞いた話を、話者は忘れてしまい、内容を記憶に拠って書いたものである可能性もある。

40 隋・河南人婦 大業中

目の見えない姑に蚯蚓を食べさせた河南の人妻が、夫に役所に連れて行かれる途中、天人の罰によって頭を白犬に変えられ、市で乞食をして

いたがやがて行方不明になった、という話。

この話も情報源を記していない。39話同様、唐臨の少年期に一般に流布していた話か、あるいは話者を忘れてしまったものと推測される。

46 隋・洛陽人 大業中

洛陽で、息子に内緒で嫁いだ娘に米を送った母親がその罪で死後に驢馬に転生し、息子に鞭打たれた苦を娘に訴えた。驢馬が母だと知った兄妹が、ものを食わなくなった驢馬を王という持戒者のもとに連れて行くと、驢馬はまた飲食するようになったが、やがて死んだので妹が葬った、という話。

この話もまた情報源を記していない。『冥報記』ではほとんどの話で話末に話者が明記されている中で、数少ない話者不明話が大業に集中しているのは、やはり、それらが唐臨にとつての古い記憶であるためと考えられる。

37 隋・姜略 大業中

隋の鷹楊郎将であった天水の姜略は、若い頃より鷹狩りを好んでいたが、病んで頭の無い鳥の群れを見るようになり、諸鳥の為に追福をすることを約束すると病氣も治った。それ以来、酒肉を断ち、殺生も行わなくなった、という話。

本話は話中には年代を明示していないが、『隋書』『百官志』に依れば大業三年（607）に驃騎府を鷹楊府に、驃騎將軍を鷹楊郎将に改称しているの、この話はそれ以降のことであると考えられる。

唐臨は隴右（甘肅省）において当時六十歳前後であった姜略に会い、この話を聞いた。

47 隋・庾抱 大業九年

兄が大業九年（613）に乱を起こした楊玄感に従ったために誅され

よって十八年で終わる。

貞観十六年(642)九月八日、朝廷の文官たちに太宗は玄武門における射芸の観覧を賜った。その席上、中書侍郎の岑文本が、唐臨とその兄の太府卿唐皎、治書侍御史馬周、給事中韋琨らに、この話を語った。岑文本は開皇十五年(595)に生まれ、この時は四十八歳であった。その三年後、貞観十九年(645)に高句麗遠征の途上、幽州で死去している。唐臨は、顕慶五年(660)ごろに六十歳前後で死去している⁶⁾ので、岑文本より五歳ほど若かったと考えられる。

2 隋・釋惠如 大業中

真寂寺の沙門釈惠如は信行の弟子であった。大業中、坐禪修道の際に動かなくなり、七日経って目を開き、閻羅王に招かれ冥途に行き、二人の物故した知人に会わせてもらえる事になったが一人は亀になっており、もう一人は業火の燃えさかる門の内にいたこと、閻羅王から絹三十匹の布施をもらったこと等を語った。絹は実際に後房にあり、惠如の足には冥途の業火で火傷をした痕もあった。惠如は武徳の初めに卒した、という話。

武徳(618-626)は唐の最初の元号で、高祖李淵の即位より退位まで、その治世の間、使用された。

話末に「真寂寺者即今化度寺也。此寺臨外祖齊公所立。常可遊觀、每聞舅氏說云尔。」とある。唐臨は高祖の建てた化度寺によく遊びに行き、その度にこの話を母方のおじから聞いていたのである。ただ高祖自身は大業三年(607)に煬帝に誅されている。

13 隋・蕭瑒 大業中

仏教を信奉していた国子祭酒(国子監長官)蕭瑒が、大業中に法華經に基づいて多宝塔を造ったところ、数年後、庭に仏塔が現れ、中には異

国風の石仏が入っており、その蓋を多宝塔の上に置き、仏像を塔中に安置した。また塔中の舍利が奇瑞を起こしたこともあった。貞観十一年(637)、臨終の際には、煬帝の皇后(蕭皇后)であった姉などが見舞い、弟の蕭瑒と尼になった娘が看取った。質素な葬儀を遺言しており、その通り行われた、という話。

貞観(627-649)は唐の二番目の元号で、太宗李世民的即位より二十三間、使用された。

蕭皇后・蕭瑒・蕭瑒は、後梁(554-587)の第二代皇帝帝蕭歸の子で、梁の武帝(「10武帝」参照)の玄孫(梁武帝—梁昭明太子—後梁宣帝—後梁明帝—蕭皇后ら)。

前田家本は本話の話者を記さず、高山寺本・知恩院本は韋仲珪の弟の韋孝諧とするが、これは次に配置されている「14韋仲珪」話の話者情報と考えられ、本話の話末に置かれたのは錯簡であろう。

7 隋・釋知苑 大業中

大業中、幽州の沙門知苑が法滅に備えて石室に石經を納める事業を行っていた時、煬帝の涿郡行幸があり、蕭皇后とその弟の蕭瑒が喜捨をして、この事業を助けた。また、一夜の暴雨雷電で貴重な木材が遠くの間から押し流されてきて、神助と評判になることもあった。やがて事業は志通りに完成し、知苑は貞観十三年(639)に卒した、という話。

唐臨はこの話を承相里玄奘や大理丞采宣明から聞いた。采宣明は35話の話者でもある。また、「臨以十九年從車駕幽州、問鄉人亦同云尔、而以軍事不得往觀」とあり、貞観十九年(645)、唐臨自身、唐の太宗の高句麗遠征に従って幽州に来ており、地元民にもこのことについて確認している。ただ、軍務中であり、実際に石經を納めた石室(房山雲居寺)を見に行くことは出来なかった。同じく従軍していた岑文本の伝に拠れ

いた夫と再会し、かつて自分が壁に埋め込んだ法華経を見つけ、主人に衣服や物品を授けて去った、という話。

唐臨はこの話を尚書の崔敦礼から聞いた。崔敦礼は開皇十六年（596）に生まれ、貞観二十年（646）に兵部尚書となり、永徽四年（653）に侍中となっているので、唐臨がこの説話を記録したのは貞観二十年から永徽四年の間ということになる。崔敦礼は顕慶元年（656）に六十一歳で死去した。

かつて盧文勵も同じような話を唐臨にしたが、魏州ではなく齊州の刺史で名も不明ということだったので、唐臨は崔敦礼の方の話を採用した。盧文勵は、「17 盧文勵」本文中に監察御史とあり同話割注に「与臨同為御史」とあるので、唐臨が侍御史だった時に監察御史であつたらしい。

35 隋・王將軍 開皇末

狩を好み、無数の獣を殺した驃騎將軍の王という者の七歳の娘が行方不明になり、家から三十里離れた棘の繁みの中で見つかったが、抱きかかえようとすると馬より早く走って逃げ、捕まえると兎の鳴き声のような声を出した。連れて帰ったがものも言えなくなっており、何も食わず、一月あまりして死んだ。父母は悲嘆し、一家を挙げて齋戒し仏道修行をした、という話。

王は代州（山西省）の人であつたが、この時は荊州（湖北・湖南省）で鎮守の任に就いていた。唐臨にこの話をした采宣明は、かつて代州の司法官であつたので事情をよく知っていた。采宣明は、「7 釋知苑」話の話者の一人でもある。

36 隋・李寬 開皇頃か

隋の上柱国であつた蒲山郡公李寬は狩が好きで、常に数十羽の鷹を飼っていた。息子が生まれたが、口が鳥の嘴のようであつたので取り上

げずに殺してしまつた、という話。

唐臨の家族は李寬と親しくしており、唐家の家人が実際に見た出来事であるという。⁽³⁵⁾

李寬は隋末の群雄の一人である李密の父であり、『隋書』卷七十「李密伝」には「父寬。驍勇善戰、幹略過人。自周及隋、數經將領。至柱国蒲山郡公、号为名將。」とある。

この説話における嘴を持つて生まれた子は李密の兄又は弟ということになるが、本話はその事件の起きた年を明記していない。李寬は、『隋書』卷六十四「來護兒伝」には「從蒲山公李寬破汪文進」とあり、開皇十年（590）に反乱を起こした汪文進の征伐を行っていることが分かるが、「李密伝」には「開皇中襲父爵蒲山公」とあつて李密が蒲山公を継いでいるので、開皇十年から開皇末年までの間に物故したらしい。李密が開皇二年（582）に生まれているので、問題の子は李密の兄であれば隋以前に生まれた可能性もあるが、弟であれば開皇中に生まれたことになる。それらの点から事件の發生時期を「開皇頃か」とした。

大業年間（605～618）

25 隋・眭仁蒨 大業初

大業の初めの頃、邯鄲令岑之象の子息文本の家庭教師となつた眭仁蒨には、成景という鬼の友人がおり、岑文本は眭仁蒨や成景から鬼に関する様々なことを聞いた。数年後、眭仁蒨は冥官に推薦され死の病となり、成景は任用を止めさせるには仏像を作製しなくてはならないと言ひ、岑文本が錢を用意して寺の壁に仏の像を描かせて眭仁蒨は死を免れた、という話。

隋の第二代皇帝である煬帝の即位により始まつた大業は、煬帝の死に

で十四年間使用された元号であり、厳恭が亀を贖ったのは太建元年（569）から数年内の出来事となる。その時、厳恭は弱冠であったということであるから、厳恭が生まれたのは梁末の550年頃であり、没したのは隋の開皇（581～600）の末なので600年ごろとなる。

隋の滅亡は義寧二年（619）、厳恭の死から、さらに二十年程後になる。

唐臨の在世時も写経事業は続いており、厳恭のことは長安でも知る人が多かった。

二 隋朝期（581～618）の説話

開皇年間（581～600）

38 隋・冀州小兒 開皇初

冀州（河北省）の郊外の村に住む十三歳の少年がいつも隣家の卵を盗んで焼いて食べていたところ、ある日、謎の役人に余人には見えない空城に入れられ、その熱い地面によって足を焼かれた、という話。

説話冒頭に「隋開皇初 冀州外邑中有小兒、年十三」とある。開皇（581～600）は、北周の静帝の禪讓を受けて即位して隋の初代皇帝、文帝となった楊堅が建元した、隋朝最初の年号である。開皇は二十年続き、仁寿と改元され、仁寿（601～604）は、仁寿四年七月に文帝が崩御し、四年で終わった。

唐臨は冀州出身の僧道恵からこの話を聞いた。

1 隋・釋信行 開皇初

相州法藏寺の僧であった信行（540～594）は母親が觀世音菩薩に祈念して生まれ、幼いときより聡明であった。開皇の初め、左僕射の

齊公高頴が文帝に奏上して信行は京師に召し出され、高頴の建てた真寂寺に住み、坐禪の際に化仏が降臨することもあった。その臨終の際には、太白山に隱遁していた弟子の僧邕が察して会いに来たが間に合わなかった。過去に正法を聞いた人は耳が通じると言われているが、信行の頭骨は両耳が通じていた、という話。

信行は東魏の興和二年（540）に生まれており、信行を開祖とする三階教の最大の外護者であった高頴は一つ年下で東魏の興和三年（541）に生まれた。高頴は唐臨の母方の祖父である。⁽³⁾

高頴が真寂寺の建てたのは開皇三年（583）、信行が入京したのは開皇九年（589）であり、信行の示寂は開皇十四年（594）、五十五歳であった。⁽⁴⁾

唐臨はこの話を老僧や母方のおじから聞いた。

41 隋・卞士瑜 開皇九年

揚州の卞士瑜の父は、陳平定の際の功績で儀同三位を授けられた人物であったが、家を建てた際に作業をした者たちに賃金を払わず鞭打ったために「死んで牛となれ」と呪われ、その言葉通り死んで牛に生まれ変わった、という話。

暗君陳叔宝が隋に降伏して陳が滅亡したのは開皇九年（589）であり、これによって隋の天下統一が成った。ただ卞士瑜の父が死んだ年は不明である。

唐臨はこの話を揚州の鍼医甄陀から聞いている。貞觀七年（633）に江東に向向いており、その際に聞いたものと考えられる。

24 隋・崔彦武 開皇中

隋の開皇中、魏州刺史の崔彦武はある村に行った時に、急に自分の前世がその村民の妻であったことを思い出し、自分の旧宅に行き、年老

養の功德で大苦を免れたことを冥途での見聞として語った、という話。

この説話には、梁の死んだ年を特定する情報が話中になく、北斉の間の出来事としか分らない。

唐臨は、この話を母方のおじである高経明から聞いた。

北周（557～581）

33周・武帝

北周の武帝は鶏卵を好み毎食数個を食べていた。皇帝の食膳を管理する監膳儀同として武帝に仕えていた抜彪は隋の文帝の即位後もこの職にあったが、開皇中に突然死亡し、三日後に蘇生した。冥界で武帝に会った抜彪は、文帝に冥界での武帝の苦しみを伝え、文帝が武帝のために追善供養を行った、という説話である。

北魏が分裂して東魏と西魏（535～556）が成立したが、西魏は第三代皇帝である恭帝が宇文覺に譲位し、二十二年で滅亡した。557年1月に宇文覺は即位し北周初代皇帝孝閔帝となったが、その年の内に廃位され殺されてしまった。武帝宇文邕（543～578）は北周第三代皇帝であり、武成二年（560）に即位、宣政元年（578）に突厥遠征の途上で崩御した。

楊堅は、北周の司空であった楊忠の子で、西魏の大統七年（541）に生まれており、武帝より二歳年上である。北周の驍騎將軍となり、武帝より随州（湖北省）刺史を授かった。楊堅の長女楊麗華は建德二年（573）に武帝の子の宇文贇（第四代皇帝宣帝）に嫁ぎ、宣帝が即位して皇后となった。

武帝崩御の三年後、大定元年（581）に第五代皇帝静帝が隋王であった楊堅に禅譲して北周は滅亡し、楊堅は隋の初代皇帝文帝となり、大定

元年は開皇元年と改元された。開皇は600年まで二十年続いた。

北周の武帝は、三武一宗の法難の二つ目に数えられる仏教弾圧を建德年間（572～578）に行っており、説話の中では、食べた卵を脇腹を破って押し出される責め苦を受けた武帝は「我今身為皇帝、為滅佛法極受大苦。可為吾作功德也。」と廃仏を懺悔して隋の文帝に追善供養を依頼している。廃仏皇帝が崇仏皇帝に助けを求める構図であり、ここにこの説話の意図がある。

この説話は割注に「臨外祖齊公親見時、歸家具説云尔」とあり、唐臨の外祖父である高頴が実際に見て、帰宅して語ったものである。ただ唐臨は開皇二十年（600）頃に生まれているので、後年になって聞いたのであろう。

陳（557～589）

11陳・嚴恭

太建の初め、嚴恭が売られてゆく五十匹の亀を贖って揚子江に放してやったところ、亀の化けた五十人の客が家を訪れ、その金を返した。これにより信仰を深くした嚴恭とその父母は揚州に精舎を建て法華經書写事業を興し、一家も揚州に移り住んだところ、もともと裕福であったのがいよいよ富み栄えたので、写経場を拡大して嚴法華里と号した。嚴恭は隋の開皇の末に没したが、その事業は子孫に受け継がれ、隋の末に賊が江都（揚州）を襲った際も嚴法華里は侵そうとしなかった、という説話。

梁は太平二年（557）に最後の皇帝である敬帝が陳霸先に禅譲して滅亡し、陳霸先は陳朝を開き初代皇帝武帝となった。太建（569～582）は第四代皇帝である宣帝陳頊の即位より崩御の年に至るま

昔、武帝が斎会を催した際、布施の目録に金額だけ記して実際には布施をしなかったために、出世の機会が空約束になったのであった。

武帝が自らの擁立した斉の和帝から禅譲を受けて即位したのが天監元年(502)で、宝誌が死去したのが天監十三年(514)であり、本話はその間の出来事となる。

「江東道俗至今伝之」とあり、唐臨は貞観七年(633)に江東に出向いており、その際に聞いた話であると考えられる。

32 梁・元帝

梁の第四代皇帝元帝である蕭繹(508～555)は武帝の七男である。六歳の時に母の珠を誤って飲み込んでしまい、それを知らぬ母親が生き魚の目を焼いて珠を盗んだ犯人を呪詛したために、元帝は片目を失ってしまった、という説話。

六歳は数え年なので、この出来事は天監十二年(508)に起きたこととなる。『梁書』『元帝本紀』は、元帝が隻眼となったことについて「初生患眼、高祖自下意治之、遂盲一目」と記す。

唐臨はこの話を『梁後説』より引いている。

東魏(534～550)

8 東魏・鄴下人

東魏の末、銀の採掘に西山に入り生き埋めになった鄴の人が、父の行った供養の功德で生き延び、北斉の文帝が即位時に西山に涼殿を建造するに及んで発見され、救出された、という話。

北魏が分裂して東魏と西魏が成立したが、東魏は孝静帝一代のみ、わずか十六年しか存在しなかった短命な王朝である。その間、四つの元号が使用され、その最後は武定(543～550)である。東魏の末とは、

武定年間ということになる。

東魏は大丞相高歓の権力が強く、高歓の死後、武定八年(550)に孝静帝が高歓の子の高洋に譲位し、東魏は滅亡した。即位した高洋は北斉の初代皇帝文宣帝となり、武定八年は改元されて天保元年となった。天保(550～559)は、文宣帝の死の年まで十年続いた。『冥報記』によると、男が生き埋めになってから救出されるまでには十余年が経過している。救出されたのは天保年間ということになる。

唐臨がこの説話を語ったのは雍州長史盧承業であり、盧承業が雍州長史であったのは貞観から顕慶の初めにかけてであった。

また、唐臨の外祖父であり、隋の元老であった高潁は東魏の興和三年(541)に誕生している。

北斉(550～577)

9 北斉・冀州人

北斉の冀州(河北省)の男が梁討伐の軍に従軍し、敵に捉えられ奴隸となった。音信不通となった男の両親が、息子は死んだものと思い、仏塔を作って追善供養を行い、その功德で男の前に不思議な僧が現れ、瞬時に男を自宅の前に連れ戻してくれた、という説話。

北斉が建国された天保元年(550)から、梁が滅亡した天保八年(梁の太平二年 557)までの八年の間の出来事となる。

唐臨の在世時、男の両親の作った仏塔は現存し、村民たちがこの話を語り伝えていた。

34 北斉・仕人梁

北斉の梁という富豪が死に際にお気に入りの奴隸と馬を殉死させることを家人に命じ、奴隸が殺されるが、その奴隸が蘇生して、梁が追善供

[55] 唐・柳智感 冥界判官(悪報救済)

[56] 唐・韋慶植 畜生転生

しかし、『冥報記』には、唐臨自身や周囲の人々が実際に見聞した出来事を記すという、極めて同時代性の強い、もう一つのコンセプトが存在する。『冥報記』を通して、唐臨の描こうとした時代の再現を目指す時、極めて整然とした『冥報記』の説話排列をあえて破壊し、説話を話中で扱っている出来事の時代順に再排列する作業も必要なこととなる。

本研究はその作業を試みたものであり、本稿は、その前半に当たる、南北朝・隋朝期の説話に関する分析の結果である。『冥報記』説話の時代順の再排列は楊守敬が『日本訪書誌』卷八所収「冥報記輯本目録六卷」において試みているが、本研究はより精密なものを目指した。

『冥報記』説話を時代順に再排列すると「31後魏・崔浩」が最も古い説話になるが、本話は、『冥報記』の他の説話のように、当事者からの聞き書きに基づくものではなく、『後魏書』『十六国春秋』などの文献に拠って書かれた。なぜ北魏(後魏)まで遡る必要があったのであろうか。本話のテーマは、北魏の太武帝による仏教弾圧(三武一宗の法難の一番目)である。因果応報に基づく仏教説話集を編纂するという意図において、最初の大法難を引き起こした太武帝と崔浩に触れぬわけにはいかないと唐臨は考えたのであろう。

仏教を誹謗する者たちとの闘争の歴史の書という、『冥報記』の別の側面が、この「もう一つの第一話」からは浮かび上がるのである。

一 南北朝期の説話

北魏(後魏) 386～534)

31 後魏・崔浩

『冥報記』の中で最も年代の古い説話は、後魏すなわち北魏の漢人宰相崔浩(381～450)に関する説話である。

北魏第三代皇帝である太武帝(在位423～455)による太平真君七年(446)の仏教弾圧(三武一宗の法難の最初)において、崔浩がその切っ掛けを作り、更に師である道士の寇謙之でさえ反対したにも関わらず僧を殺し尽くすことを進言したこと、その報いで四年後の太平真君十一年(450)に無実の罪で一族もろとも誅殺されたことを記す。崔浩の誅殺は、崔浩が人を推薦して無理に大官にしたこと、国史編纂の際に北魏の支配層である鮮卑族についてありのままに記述したことが鮮卑族に対する侮辱と見なされたこと等が原因とされている。

この説話は、さらに太武帝が皇太子を不本意ながら誅殺したこと、そして太武帝自身が宦官の宗愛に殺されたことを記す。太武帝の皇太子拓跋晃の死は、太平真君十二年(451)に病死したのであり、誅殺されたのではない。宗愛が太武帝を弑逆したのは正平二年(452)である。

『後魏書』『十六国春秋』などに拠る。

梁(502～557)

10 梁・武帝

梁の初代皇帝である武帝蕭衍(464～549)の即位前からの知人が、皇帝となった武帝の約束してくれた県令の職にありつかなかった理由を、名僧宝誌(418～514)が解き明かすという説話。その男は、

[08]	東魏・鄴下人	無名僧靈驗			
[09]	北齊・冀州人	無名僧靈驗			
[10]	梁・武帝	仏法擁護者			
[11]	陳・嚴恭	仏法篤信者			
卷中 信心による善報					
[12]	隋・大業客僧	神の解脱			
[13]	隋・蕭璟	篤信者解脱			
[14]	唐・韋仲珪	孝子奇瑞			
[15]	隋・孫宝	冥界救母			
[16]	唐・張亮	仏像救命			
[17]	唐・盧文勵	観音治病			
[18]	唐・戴胄	出世の予言			
[19]	唐・李大安	仏像救命			
[20]	a 唐・董雄	法華経救命			
[20]	b 唐・蘇長	法華経救命			
[21]	唐・岑文本	法華経救命			
[22]	唐・元大宝	修福の勧め			
[23]	唐・邵師弁	持戒により死を免れる			
[24]	隋・崔産武	二世の仏縁			
[25]	唐・睦仁蒨	冥助により禍難を避ける			
[26]	唐・李思一	仏縁により冤罪を免れる			
[27]	唐・周善通	持戒致富			
[28]	唐・豆盧氏	金剛般若経による治病			
[29]	唐・李山龍	法華経による蘇生			
[30]	唐・遜邇璞	修福による蘇生			
卷下 反仏法者の悪報					
[31]	後魏・崔浩	毀仏悪報			
[32]	梁・元帝	呪咀悪報			
[33]	周・武帝	食卵悪報			
[34]	北齊・仕人梁	殺生悪報			
[35]	隋・王將軍	田獵悪報			
[36]	隋・李寬	田獵悪報			
[37]	隋・姜略	田獵悪報			
[38]	隋・冀州小兒	食卵悪報			
[39]	隋・京兆獄卒	酷暴悪報			
[40]	隋・河南人婦	不孝悪報			
[41]	隋・卜士瑜	慳悋悪報			
[42]	唐・殷安仁	殺生悪報			
[43]	唐・趙士	畜生転生			
[44]	唐・潘果	殺生悪報			
[45]	唐・馬嘉連	殺人悪報			
[46]	隋・洛陽人	畜生転生			
[47]	隋・庚抱	殺人悪報			
[48]	唐・臨邛人韋	殺人悪報			
[49]	唐・孔恪	殺生悪報			
[50]	唐・李寿	殺生悪報			
[51]	唐・竇軌	殺人悪報			
[52]	唐・傅奕	譏仏悪報			
[53]	唐・王璿	不信悪報			
[54]	唐・張法義	不孝悪報			

『冥報記』クロニクル―南北朝・隋朝編―

The Chronicle of Mingbaoji — Nanbeichao · Sui Dynasty —

『冥報記』年代録―南北朝・隋朝部―

三田 明弘
MITTA Akihiro

【要旨】唐朝初期成立之佛教志怪小説『冥報記』の重要特点是时代性。『冥報記』编纂者唐临非常重视故事的纪实性。『冥報記』收載之故事的大部分是唐临的亲戚朋友们亲眼看到的，或者从当事者直接听到，甚至自己体验的「真实」故事。在这次研究中，论者按照时代前后将『冥報記』收載之全部故事重新排列，复现『冥報記』之作为一部历史书的真面目。『冥報記』不仅是一部释家辅教之书，又是一部从与诽谤者斗争之角度看的佛教历史书。

本论文登載整个研究的前半部分・南北朝・隋朝部分。

はじめに―もう一つの「第一話」―

説話集において、いかなる説話が冒頭に配置されているかということは、その説話集の編纂コンセプトに関わる、極めて重要なことである。

唐代の代表的な仏教説話集である『冥報記』三巻の全体を俯瞰すると、巻上は高德の僧や仏法擁護者など上品の人々の活躍する説話、巻中は信心により救済される中品の人々の善報譚、巻下は、下品の者らの様々な悪行と悪報の説話という明確な主題のもとに区分されていることが看取

される。これは唐臨の深く信仰していた三階教の、人を出世間の根機によつて上から第一階衆生・第二階衆生・第三階衆生に三分する考えの反映とみることが出来、『冥報記』が三階教の開祖である信行の伝記を冒頭に配するのは必然であった。

以下に『冥報記』所収全説話の、時代・標題と主題を付したリストを掲げる。

巻上 高德の僧・仏法擁護者

〔01〕隋・釋信行 往生奇瑞

〔02〕隋・釋惠如 閻羅招請

〔03〕唐・釋僧徹 治癒靈驗

〔04〕唐・練行尼 法華經靈驗

〔05〕唐・釋道慈 往生奇瑞

〔06〕唐・釋道英 入定示驗

〔07〕隋・釋知苑 木材靈驗